

令和元年6月18日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01197

研究課題名(和文)手芸文化データベースの構築と教育現場への活用

研究課題名(英文) Building of a data base of handicrafts culture and utilization to a field of education

研究代表者

中川 麻子 (Nakagawa, Asako)

大妻女子大学・家政学部・准教授

研究者番号：60468329

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は明治～昭和時代の女子教育で行われた高度な手芸教育の再評価と、教育現場への活用方法を見出すことを目標に行った。関東の女子大学4校所蔵の手芸作品881点と手芸技法書5冊の画像からデータベース(非公開)を作成した。このデータベースを学生30名、手芸をする一般ユーザー4名に試用してもらった。この結果を受け、一般的なHP型とSNS型を作成し、データベースとリンクさせたことで、検索性と情報発信力が高まり、ユーザーの使用性が向上した。手芸文化を広く発信し活用するには、データベースは有効な手段であり、さらに汎用性の高いSNS等のフォーマットを併用することが重要であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

手芸は、現存作品も多く、社会的関心も高いにも関わらず、これまで十分な研究がされてこなかった。データベース作成によって、異なる大学の手芸作品について、技法詳細、作品例、制作年等を横断的に自由に検索できる。博物館で展示の機会が少ない手芸作品を誰でも手軽に閲覧でき、手芸作品の復元につながるなど、若い世代への伝承に有効な手段であることが明らかとなった。各所蔵館の画像公開の許諾等の問題は残るが、将来的に参加館やデータ数が増えれば、手芸文化の研究基盤として利用でき、教育現場への活用も可能となるといえる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to re-evaluate advanced handicraft education conducted as a part of female education during the Meiji and Showa eras, and to find out how to apply it in the educational field. A database (not opened to the public) was created from images of handicrafts of 881 items held by four women's colleges in Kanto area and five handicrafts technique books. We had thirty students and four ordinary users doing handicrafts try this. Based on this result, we came to conclusion that by creating general HP type and SNS type and linking with the database, the searchability and information dissemination ability has increased, and usability of user has improved. As it became clear from this research, in order to widely disseminate and utilize handicraft culture, the database is an effective method, and it is important to use a more versatile format such as SNS.

研究分野：服飾文化史、デザイン史

キーワード：手芸文化 女子教育 服飾文化 博物館 データベース 明治時代 大正時代 昭和時代

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

明治～大正時代における日本の手芸教育は、他に類をみないほど高レベルのものだった。手芸教育については、19世紀にはイギリスの刺繍教育、ベルギーのレース教育、20世紀後半の北欧の手工芸教育が知られているが、いずれも特定の階級や思想を持つグループの創作活動、または職人養成の職業訓練としての側面が強く、一部の人々を対象としたものだった。これに比べ、日本では、明治～大正時代に設立された女子学校のほとんどで手芸教育が行われた。このようにほぼ同時期に、高度な手芸教育が国を挙げて行われたのは世界的に見ても稀な例である。

日本では、江戸時代から伝承された技芸と、明治時代に持ち込まれた西欧の手芸文化が互いに影響しあい近代的手芸が誕生した。特に刺繍分野は、絵画的な図案を高度な刺繍で表現した美術刺繍が生み出され、海外博覧会ではフランスやイタリアを超える絶対的な評価を得ていた。この影響もあり、当時の女子教育では世界でもトップクラスの刺繍教育が行われていた。また刺繍の他にも、編物、レース、造花が、精神の涵養と女性の自立を促す芸術性の高い新職業として期待され、手芸教育が黎明期の女子教育の根幹に置かれた。

大正時代を経て、昭和時代前半になると、手芸は一般家庭にも広まり、戦後は手芸関連団体や教室が各地に設立され、優れた手芸作品が各地で生み出された。しかし、昭和時代後半の手芸ブームによって愛好者が増加する一方で、「女性が針と糸で物を作る家庭的な趣味」というイメージが強まった。現在では、工芸や美術に比べて文化的価値が低いと見なされ、教育課程においても手芸の教科は減少している。昭和50年代の家庭の主婦を中心とした手作りブームを経て、手芸の人気は一旦収まっていたが、平成時代には野田（2003）、坂元（2012）等の研究によって、高齢者の健康増進や、地域コミュニティ活動の活発化に有効な手段であることが明らかとなり、再び注目を集めている。さらに若い世代には新しい手芸ブームが生まれ、お洒落な趣味として新聞やファッション雑誌に取り上げられている。また男性の手芸愛好家の増加、手芸を中心とした新しいコミュニティの誕生、インターネットによる愛好者の交流も増え、日本の手芸文化はますます盛んになってきている。

しかし若い世代は、明治時代～戦前の日本において、非常にレベルの高い手芸教育が行われていたことを知らない。申請者が所属している大妻女子大学も大正時代に裁縫と手芸の私塾として始まっているが、被服学科の在学学生であっても、当時の高度な手芸教育について知らない者が多い。これは昭和時代後半に、手芸の社会的イメージが主婦の趣味として定着し、大学や小中学校の家庭科において手芸科目の実習が減少したこと、また先の手芸全盛期を支えた世代の高齢化による世代間の隔たりが要因となっていると見られる。しかしその一方で、手芸や裁縫に興味のある本学の学生37名に、明治～昭和時代前半の手芸作品を紹介したところ、ほぼ全員が強い興味を持ち「もっと詳しく知りたい」と答えた。また当時の技法について調べ再現作品に取り組む学生も現れた。こうした若い世代に、日本の優れた手芸文化を紹介することは、日本の手芸文化の伝承に繋がる。また和食の世界遺産登録や東京オリンピック開催など、世界が日本文化に注目している時期に、世界に向けて「手仕事の日本」を強くアピールすることができると考えられた。

2. 研究の目的

各地の博物館や女子大学には、当時の学生・教員作品が数多く残されている。その多くは年代や制作背景も分からず未整理のままである。これは、手芸の文化的・学術的価値が低いと認識され、研究が進んでいないことを示している。手芸の文化的価値を正當に評価するためには、近代的手芸の成立過程と作品の調査は欠かすことができない。また、戦後の手芸ブームを支えた担い手の高齢化が進んでおり、早急にインタビューを行う必要がある。日本の優れた手芸文化を次世代に継承し、世界に発信するために、新たな視点から研究を始めなければならない。本研究は3カ年を計画し予想される結果は、以下の4点と定めて行った。

- ① 関東を中心とした大学博物館所蔵の調査から、手芸作品の年代別傾向と学校別の特徴を明らかにする。
- ② 明治～昭和時代における手芸教育と作品の文化的価値の再評価を行う。
- ③ 日本の手芸文化アーカイブ化に向けて、代表校の所蔵作品データベースを作成する。
- ④ 作成したデータベースをe-ラーニングで試験運用し、教育への活用方法を提案する。

3. 研究の方法

本研究は申請者と連携研究者1名、研究協力者1名の協力を得て行った。またデータベースの専門家1名に協力を仰ぎ、データ入力および分類への意見をもらった。

研究は作品調査、学校関係者へのインタビュー、資料のデータベース化、データベースの試験利用とフィードバックの4段階に分けて行った。作品調査については、大妻女子大学、共立女子大学、女子美術大学の所蔵手芸作品を調査し、作品をデータ化した。研究当初はファイルメーカーを使用する予定であったが、データ利用の観点からエクセルに変更して行った。上記の四大学の卒業生2名および元教員2名に、手芸教科についてインタビューした。さらに収集した作品データを整理、年代特定、技法分類を行い、データベース作成を行った。作成した手芸文化データベースを、大妻女子大学の学生および博物館関係者に試験利用してもらい、手芸教育への活用方法を探ると共に、フィードバックをもとにデータベースの改善を行った。

4. 研究成果

平成 28 年度は基礎的な作業として、資料整理およびデータベース作成を中心に行った。大妻女子大学博物館所蔵の手芸作品約 400 点はファイルメーカーによるデータベース化を行い、大学出版物および大学カリキュラムとの照合を行った。大妻女子大学に所蔵されている手芸作品は、学生名、手芸技法、学校名から、大正時代末期から昭和時代前期の作品が中心となっていることが明らかとなった。刺繍の大型作品で現存するものは少ないが、レースやビーズといった服飾の装飾に適した手芸作品の所蔵が多く、実践的なカリキュラムの傾向が見えた。

また他大学の手芸作品については、これまでに収集した資料の整理と作品分類を行った。これと平行して、大正時代の女子手芸教育の内容について、函館大妻高等学校、共立女子大学、女子美術大学の所蔵作品と当時の書籍、雑誌資料から検討した。函館大妻高等学校の作品については、千代田キャンパスでは震災や戦災によって失われたと考えられる中～大型の刺繍作品など、大正時代末期の大妻手芸教育に関する資料を多数確認することができた。

資料整理と同時に、特に刺繍教育のカリキュラムに焦点をあて、当時の美術染織分野との関連について調査を進めた。明治～大正時代の刺繍教育について、現存する作品の比較を行ったところ、複数の学校で特定の図案が課題となっていたことが明らかとなった。図案の構図、用いられた刺繍技法、当時の教師陣の出身校などから、明治時代後期における女子刺繍教育のカリキュラムでは、京都を中心とする美術刺繍分野の強い影響を受けていたことを明らかにすることができた。

平成 29 年度は、データベース構築のための基礎作りを重点的に行った。手芸データについては、東京家政大学、女子美術大学、共立女子大学の資料について、エクセルデータの打ち込みをほぼ終了させた。インタビュー調査については、大妻女子大学の卒業生 2 名と、元教員 2 名を中心に行い、昭和時代後期～平成 10 年代にかけて、被服学科で行われていた手芸教育について聞き取り調査を行い、当時の卒業制作や課題の内容をまとめた。

共立女子大学では、同学博物館所蔵の手芸作品のうち、未調査だったものについて追加調査を行った。この結果、同学では完成度の高い刺繍画、草履や半襟などの服飾小物類、箱せこなどの袋物の作品が多数所蔵されており、また同じモチーフの作品が繰り返し作成されていたことが明らかとなった。また和洋女子大学の博物館では、学生が共同制作をした大型の刺繍作品が多数所蔵されていることがわかった。

データベース構築に向けた基礎調査として、博物館の所蔵品データベース作成に携わる専門家 7 名と意見交換を行なった。専門家の方から使いやすいデータベースの留意点を伺い、この結果を受けておおよその画面レイアウトと項目を設定することができた。また 2018 年 1 月 27 日に文化学園大学において開催された文化庁アーカイブ中核拠点形成モデル事業報告「日本のデザイン資源を考える」第 2 部のディスカッションに参加し、デザインのデジタルアーカイブの在り方について討論した。このシンポジウムでは、手芸を含む服飾分野の作品の特性から、デジタルアーカイブが非常に有効であること、また専門家以外にも使いやすいデータベースデザインが必要であること等、本研究に有用な知見を得ることができた。本研究は明治～昭和時代の手芸教育に脚光を当て、現存作品をアーカイブ化し手芸文化データベースの基盤を作り、教育現場で活用と手芸文化継承を目指し、また海外に向けて日本の優れた手芸文化を広く発信する手段を見出すことを研究目標とした。

最終年度であった平成 30 年度では、データベースの補完と入力を行ない、最終的に 4 校分 881 点を収録したデータベースを完成させた。また関連する手芸技法書 5 冊から画像と記述を追加した(図 1、2)。その結果、不明だった作品の大多数は昭和時代前期に制作されていたこと、各大学で制作された技法に類似があることを明らかとした。また明治～昭和時代までの代表 4 大学の年表を作成し、学習内容と現存作品をプロットし一覧できるようにした。

本研究では早稲田システムの博物館データベースを利用し非公開の形式で制作した。このフォーマットは HP 内の検索機能が充実しており、技法や学校名等から作品を検索することができるのが特徴である。

被服教育受講の学生 30 人、および手芸を趣味として行っている一般ユーザー 4 名にデータベースを使用してもらいアンケートおよびインタビューを行ったところ「自分の大学でこのような手芸作品が所蔵を知らなかった」「いろいろ見られて面白い」と全員が興味を持った。しかし「検索機能は便利であるが、技法の知識がないと利用しにくい」という意



図 1 手芸文化データベース トップページ



図 2 手芸文化データベース 作品詳細ページ

見が上った。

手芸データベースを利用すると考えられる主なユーザーは①博物館関係者、②手芸を趣味とする一般人、③手芸を本格的（展覧会出品、販売等）に行う一般人やセミアマチュア、④被服分野の学生が考えられる。本研究で使用した早稲田システムズのデータベース型は、検索や所蔵管理がしやすく博物館関係者には使いやすい仕様であるが、②～④の一般人および学生には「真面目すぎる」「何を調べていいのかわからない」「興味が湧きにくい」といった意見が多かった。特にデータベースの特徴である検索機能に対しては「(予備知識がないため) どんな検索をしていいのか分からない」と使用を戸惑う被験者が多かった。

データ入力に際して、作品のキーワードには通常博物館や研究者がよく用いる手芸技法、学校名、作品形式などを記入してデータ整備をしていたが、一般的なユーザーはこういった言葉を使用しないため、検索しても作品がヒットしないこともしばしばあった。また作品形式についても、昭和時代によく用いられた「花瓶敷き」「テーブルセンター」といった名称を知られていないため、検索ワードとしては殆ど機能していなかった。ユーザーは「花」「かわいい」「レース」「ピンク色」等といった、手芸技法ではなく SNS（インスタグラム）の検索ワードと同様の言葉を使用する人が大多数であることがわかった。

その一方で、②～③の手芸を実際に行うユーザーは、作品制作のためにより作り方のヒントを得るために、詳細な作品説明や拡大図を見たいといい、その点ではデータベースにある作品画像の拡大機能や、複数の画像を見られる点、そこから類似する作品を検索できる機能が魅力的であると答えた。

このため掲載点数を絞ったテストバージョンとして一般的な HP 版と SNS（インスタグラム）版を作成した（図 3～5）。一般的な HP 版では、アーティストの作品ギャラリーのように作品が閲覧できるレイアウトとした。デザイン面ではスタイリッシュでユーザーの好感度は高かったが、検索ができないこと、詳細な作品情報を得るにはサイトの奥に進む必要があること等から、直感的な操作がしにくいという意見があがった。正方形にトリミングされた画像が一覧でき、予備知識がなくても興味を持った作品を閲覧できるのは手軽であり、見やすく馴染みやすいと好評であった。これらの意見から、若い世代へ発信するためには SNS 版をトップページと位置づけ、作品詳細はデータベースとリンクさせる方法が有効であると考えられる。

本研究のデータベースに触れ、現存手芸作品に興味を持った学生のうち 4 名が計 7 点の復元作品を制作し卒業研究として取り上げるなど、データベースによって学生の学びを活性化できた。博物館を訪れる機会が少ない学生にとって、SNS 型のデータベースで手芸作品を目にすることは、学びの機会を広げることが十分に考えられる。しかしその一方で、博物館の作品公開については、各館独自の基準があり、相互利用、画像の著作権、公開、外国語等に対応等については協議する問題点は多く、すぐには実現化が難しいことも課題として残った。海外では V&A、メトロポリタンミュージアム等がすでにインスタグラムを利用して積極的に作品を公開し、多数のフォロワーに向けて情報発信をしている。このように多くの人の目に触れる機会を増やすことが、日本の手芸文化への興味を高め再評価につながると考えられる。日本の手芸文化を発信するためには、将来的に画像公開に関する問題を解消すること、一般ユーザーから博物館関係者までが使いやすいフォーマットを用意することが重要であることが明らかとした。



図 3 HP 版データベース トップページ

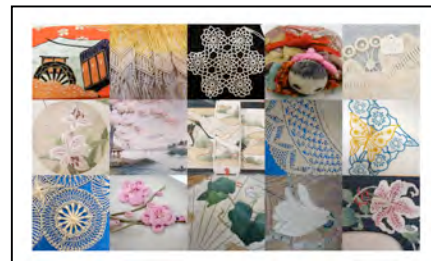


図 4 HP 版データ 作品詳細ページ

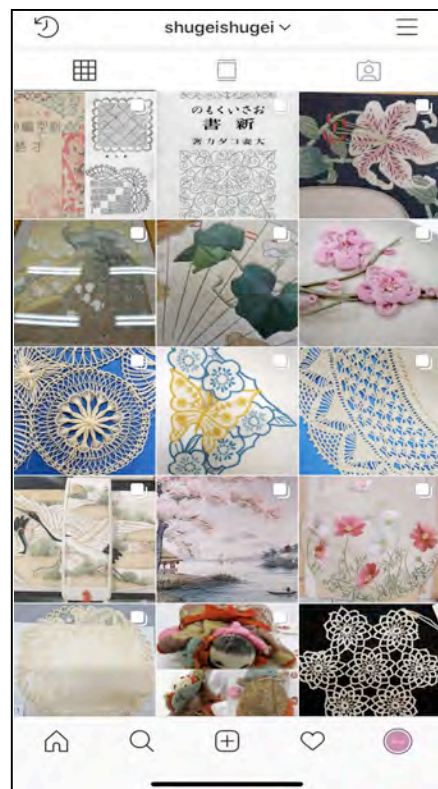


図 5 SNS（インスタグラム）版

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

1. 中川麻子「共立女子職業学校と美術刺繍」共立女子大学博物館年報/紀要 2 号、2019 年、

- 37-47 頁、査読無。
2. 中川麻子「函館大妻高等学校所蔵の外山ハツによる刺繍作品」大妻女子大学家政系研究紀要, 53 号、2017 年、1-8 頁、査読無。
 3. 中川麻子「明治～昭和時代にかけての女子刺繍教育における孔雀刺繍の制作背景 - 共立女子職業学校を中心に -」服飾文化学会誌、17 巻、2017 年、1-12 頁、査読有。

〔学会発表〕（計 2 件）

1. 中川麻子、文化庁アーカイブ中核拠点形成モデル事業報告（招待講演）「日本のデザイン資源を考える」2018 年
2. 中川麻子、共立女子大学博物館記念招待講演（招待講演）「明治・大正時代の女子教育における刺繍」2017 年

〔図書〕（計 1 件）

1. John Vollmer, Diane Genre, Asako Nakagawa, Takashi Hirota, Iwao Nagasaki, Susan Tosk, Hiroko T. McDermott, Sonia Ashmore, Will Chandler, *Re-envisioning Japan - Meiji Fine Art Textiles*, 5Continents, 2016, 256

6. 研究組織

(1) 研究協力者

研究協力者氏名：小島 咲

ローマ字氏名：Saki Kojima

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。